

歴史を語る建物たち

庄内編
(第17回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧小池薬局恵比寿屋本店（鶴岡市）



鶴岡市の銀座通り商店街の一角に、「鶴岡飲料株式会社」という看板が掲げられた建物がある。平日の昼間にもかかわらずシャッターが下りており、ある意味、全国的に問題となっている中心市街地の「シャッター通り」を象徴するような光景だが、この建物が今後、大きく生まれ変わろうとしている。

人々が驚いた鉄筋コンクリートの薬屋

安政2（1855）年刊行の『東講商人鑑』によれば、鶴ヶ岡城下之図に記載がある3つの薬店の1つに、五日町のゑびす屋がある。五日町とは現在の銀座通り商店街を指すことから、江戸時代末期にはすでに、この地に薬店があったことが分かる。

ゑびす屋の初代藤治郎は、同じ米沢市出身の医師、小池仲郁を頼って薬屋を開業した（鶴岡市史・下巻）。仲郁は腕の良い蘭医で、孫の直正は軍医総監を務め、日露戦争では、赤痢チフスの特效薬として「征露丸」

（現在の正露丸）の発明に携わったとされる。

藤治郎の薬店は繁盛し、明治元(1868)年には寸志金100両を庄内藩に献上し、苗字を許された。以後、藤治郎は小池仲郁の弟分として、小池姓を名乗った。

2代目・小池藤治郎は初代以上に商売上手で、お客が望む商品なら何でも取りそろえた。「ゑびす屋に頼めば、豆腐油揚げでも、棺桶でもそろえてくれる」という言い伝えが残るほどである。伝染病が発生した際には、薬品ばかりでなく、卵などの食品や雑貨に至るまで調えるなど、ますます商売は繁盛した。後に、書店と洋品小間物店を分家としたことが、「恵比寿屋本店」と呼ばれるゆえんである。

昭和9（1934）年には、現存する、鶴岡市の個人所有では最初の、鉄筋コンクリート3階建て店舗を建造した。いわゆるビルディングであるが、資金的に高額であることから、人目を驚かせた（目で見える鶴岡百年・酒田 別巻）。

完成当初の恵比寿屋本店ビル。個人所有としては鶴岡で最初の鉄筋コンクリート建築であり、多くの人を驚かせた。出典…春日儀夫編『目で見える鶴岡百年・酒田 別巻』



建物の2階と3階は何に利用？

3代目・小池藤治郎も、初代、2代目に劣らぬ商売上手であった。彼は、第一次世界大戦中の好景気とその後の変動期に、株式の取引で巨万の富を築き、市内若葉町に豪壮な別荘を建設した。この別荘には、陸軍大将朝香宮鳩彦王殿下（今上天皇の大叔父）も昭和初期に宿泊している。

もちろん、藤治郎は本業の薬品販売にも力を入れた。特に、東京の薬店・守田寶丹が全国展開していた常備用の胃腸薬「守田宝丹」の売り上げでは全国5位を誇り、鶴岡のみならず、山形県でもナンバーワンの薬店として、その地位を固めていった。

さて、鉄筋コンクリート3階建ての店舗に話を戻すと、どうやら、薬品をメインとした商売が行われていたのは1階だけだったようだ。では、2階と3階は何に使われていたのか？

建物の保存に関わる、東北公益文科大学学外研究員の國井美保さんは、「資料がないので分からない」と話す。ただし、「階段の配置や天井の明り取り窓などから、従業員を住まわせていた可能性もあるし、3階には和風の飾りが残っていることから、畳を敷いた大広間として、客人をもてなしていた可能性もある」と推測する。

昭和の中頃までは、銀座通り商店街のにぎわいとともに、薬店も隆盛を極めていたが、商店街の衰退に合わせるように売り上げも減少し、最後は競売物件として、平成25(2013)年に鶴岡飲料(株)の所有となった。

再生に向けたプロジェクトが発足

建物の新たな所有者となった鶴岡飲料(株)でも、結局は建物を解体して、土地を売る方向で考えていたようだ。それに待ったをかけたのが、高谷時彦・東北公益文科大学特任教授を中心とする、研究室のメンバーたちであった。國井さんもその1人である。

平成26(2014)年には、高谷研究室のほか、建物保存に関心を持つ市民や大学院生、建築関係者、行政（山形県、鶴岡市）まちづくりNPO、地域金融機関などが

参画して「恵比寿屋プロジェクト」が発足した。

プロジェクトの活動は、主に建物の構造を含めた歴史的調査である。活動直前に4代目・小池藤子氏が亡くなったことから、國井さんは「藤子さんのご存命中に、もっとお話を伺っておけばよかった」と悔やむが、活動は前進し、翌平成27(2015)年には成果報告書としてまとめられた。

活動を進めるうちに、所有者の鶴岡飲料(株)も、「中心部のまちづくりに資するなら、建物を定常的に賃貸してもいい」と理解を示すようになった（成果報告書より）。現在は、タウン情報誌e-Townsの発行などを手掛ける、(株)アイディア代表取締役の北風秀明さんと、オーダー家具製造などを手掛ける、(有)アトリエイマジン代表取締役の渡部芳幸さんが、「店子」として建物を借りている。

歴史的建造物保存に求められる「無私の心」

実は、今年6月後半に、建物は新たな活動拠点としてグランドオープンする予定であったが、雨漏りが原因で見送られることになった。北風さんは、「雨漏りの修理費用は、国の補助金に期待している。足りない分は、店子である私たちと、銀座通り商店街で補いたい」と話す。その上で、「この建物がリノベーションされれば、間違いなく商店街のシンボルとなり、商店街の活性化につながる」と力説する。

今回、國井さんと北風さんにお話を伺いながら考えていたのは、お2人とも「無私の心」で、建物の保存活動に取り組んでいることである。例えば、「この建物は保存されるべきである」という、紋切り型のような使命感は見受けられない。もちろん、建物をリノベーションして一儲けしようとか、その立役者として表に出ようとか、そうした思いも全く感じられない。あえて言うなら、傷ついて飛べなくなった鳥を介抱して、再び大空に飛び立たせる、そんな慈しみの気持ちが、自然な形で活動に表れているといえようか。これは、歴史的建造物が保存されるために、非常に重要な要素である。

雨漏りの修理を終えた後、どのような美しい弧を描きながら建物が飛び立っていくのか、大いに注目したい。

（フィデア総合研究所主任研究員・山口泰史）

2階外壁に掲げられた看板。「寶丹」の文字が読める。明治期に、東京の「守田宝丹」から贈られたと伝えられるが、北風氏が現在、特別に窓を開けていただき、筆者がべらん。

